

賢明さんが懸命に語る小値賀の旧所名所ばなし

ご挨拶

本コーナーを担当します、文化財係の平田賢明です。どうぞよろしくお願いいたします。さて、ヤマカンから指令を受けたのは6月のことです。『あんだ、こちらでいっちょ公民館便りに連載ばしちゃんね!』とヤマカン。いつも体育会系です。『わかりました!』答える私。大先輩に対して拒否権は持ち合わせていません。『町の皆さんが、小値賀ば誇りに思えるような旧所名所ばなしば書かんね!そんでさ、皆さんが読んで、その場所に観光客や知り合いば連れていきたくて思える内容にせんばよ。たのむけん!』とヤマカン。誇りに思えて、かつ、その魅力を他の誰かに伝えたくなるような記事を書けて…まさに難題です。しかしながら「旧所名所ばなし」を通して、小値賀の歴史文化の魅力を伝える大チャンス!と前向きに捉え、全力で挑みたいと思います。しばらく、お付き合いのほどお願いいたします。

第1話 小値賀は火山活動、五島は隆起で生まれた。

10年前、私が小値賀に移り住んで、まずはじめに驚いたのは、町内のあらゆるところで「火山活動の痕跡」が見られること。鉄分を多く含む赤土。噴火丘が海の波に浸食されてできたダキ。溶岩が冷えて固まった真っ黒な磯場。『ここは、ガラパゴス諸島か…。』(火山で有名な世界遺産の島)衝撃と感動を覚えました。ところが、まわりの方々にお伺いすると、噴火の時期や特徴を知る方は、ほとんどいませんでした。大昔の話なので、知るすべが少ないのだと思います。そこで、記念すべき第1話は、皆さんがなんとなく知ってはいるけど、詳細はあまり知られていない、「島の成り立ち」をテーマにして、お伝えします!

実は、もともと小値賀を含む五島列島の周辺は海ではなく陸地で、「古野島湖」という巨大な湖がありました。この湖の底に流れ込んで厚く堆積した「五島層群」と呼ばれる土砂が、地殻変動で「隆起」し、南北約100kmに及び大山脈となりました。これが約1,000万~200万年前の話です。この大山脈が現在の五島列島の島々の基盤となっています。

一方で、小値賀の大半の島々の基盤は、「火山群」の活動によって作られました。活動は約110万年前にはじまり、多くの噴火丘を残しながら約30万年前まで続きました。噴出した溶岩は粘りが弱く、広範囲に広がったために、お皿を伏せたような低い丘が多く作られました。『五島は山んたっか。小値賀は平べったか。』とよく比較されるのは、そもそもの基盤の成り立ちが異なるためです。

その後、「隆起の大山脈」、「火山の低い丘」の両者が「島」となるのは、約1万年前のこと。地球規模の温暖化を要因に海水面が上昇し、谷や低地に海が侵入してきたためです。つまり、小値賀や五島列島が島となったのは、ごく最近の話なのです。聞きなれた言葉でいうと、この時代は「縄文時代」と呼ばれます。弓矢を使い、狩猟をし、獲物は土器で煮炊きして食べる。夜は竪穴式の住居で家族と眠る。そのような暮らしが営まれていた時期です。この頃にはすでに、小値賀周辺地にも我々の祖先である縄文人が多く暮らしていました。日々、上昇し陸地を奪う海面。そして大陸から島への分断。さぞかし不安な日々を送ったことでしょう…。

ちなみに、五島列島では小値賀の島々のほかに、宇久島、福江島、嵯峨ノ島等でも火山活動の痕跡が確認されています。

(参考文献 鎌田泰彦1996「西海国立公園・鏡瀬ビジターセンター-地学関係展示の解説-」『長崎県地学会誌第60号30-35』塚原博編2012小値賀町文化財調査報告書第23集『小値賀諸島の文化的景観保存調査報告書』小値賀町教育委員会)

中学校の校歌もすごいぞ!

日本一の小学校校歌について書いた後、小値賀中学校の校歌が気になりました。作詞をされた近藤益雄先生について、ちょっと調べてみてびっくり…。とてもすごい人でした。益雄先生は、佐世保市生まれの、平戸島育ち。「文学の道にあこがれて上京し」大学進学とともに詩や俳句の世界に没頭。詩の仲間と同人誌や詩集を発行したり、荻原井泉水門下の自由律俳句の新人として活躍したりした。(山頭火も同人)

大学卒業後は、北松浦郡内の小学校の教師となり生活つづり方教育に没頭していく。日々の生活を見つめ、つづり方(作文や詩)の作品とともに、豊かに成長していく子どもたち。教師としてのやりがいを感じている矢先に…。年度途中(昭和6年9月)の不意転任。いわゆる突然の強制配転。

不意転任先は、この小値賀。ここで生涯の友、穎原重雄氏(元小値賀町教育長)と出会う。2人してつづり方研究会をつくり、子どもたちの作品を読みながら、夜を徹して議論しあう。小値賀勤務は1年7ヶ月と短い、その間、児童文学誌「赤い鳥」(選者北原白秋)に入選した小値賀の子どもの作品は31編。白秋にして「小値賀校の進出は今後にも期待される。(批評欄)」と言わしめている。

戦後は、小学校の校長も務めるが自らの意思で辞し、知的障がい児・者教育に先駆的に取り組んでいく。さらに福祉と教育の一体化を目指し、「起居を共にする生活教育」を実践する入所福祉施設「のぎく寮」を創設し運営にあたる。

読売教育賞、西日本文化賞、文部大臣表彰、ヘレンケラー賞など受賞。

特殊教育(現特別支援教育)に関する先生の一文を紹介します。

「平和なくしてこの教育もなく、この子どもたちのいのちもないということをおもう。人間のねうちを、ほんとうに平等に大切に作る世の中であるならば、きっと平和がもらえるにちがいない。この子どもたちも、完全に守られるにちがいない。」平和と命を守り、一人ひとりの人間を大切にする教育…先生がかかげた理想の炎は、現代に引き継がれ燃え続けています。

さてここで、小値賀中学校校歌をあらためて載せてみます。(紙面の都合で2番まで)

近藤 益雄作詞

野崎のお山 紫に 海南風の春にして
平和の鐘を 打ちならす このひびき このひびき
小値賀中学 ここにあり
夏番岳に 雲わけば 大海原に日輪の
理想は今や 火ともゆる この光 この光
小値賀中学 ここにあり



野崎と番岳。小値賀の象徴が、一二番に登場します。小値賀とのかかわりは、昭和6年9月から昭和8年3月までのほんのわずか。どういう経過で、戦後の小値賀中学校の校歌を作詞する(昭和22年ごろ)ことになったのか調べましたが、情報不足でわかりませんでした。ちなみに近藤益雄先生は、小学校校歌作詞の藤浦光先生の9歳年下で、中学猶興館の同窓だそうです。不思議な縁です。(参考文献 「福祉に生きる 近藤益雄」清水寛著、「子どもに生きる」清水寛・近藤原理編)

※ずいぶん暑さが和らいできました。今月は、敬老会と町民レク。それぞれに楽しみです。